

29 関連性理論における関連性と認知関連性の原理

Griceが語用論研究の発展において多大な貢献をした学者であることは言うまでもないが、Grice語用論で指摘されている課題点の一部は前項に挙げた通りである。

これに対し、Dan SperberとDeirdre Wilsonが提案する**関連性理論（Relevance Theory）**は、不十分にしか記号化されていない発話から、聞き手はどのように話し手の意図した意味を推論しているかということを探る、聞き手の立場から発話解釈の仕組みの解明を目指した理論である。

関連性理論はGrice語用論の抱える課題点の改良を出発点としたが、まずは、関連性理論における**関連性（relevance）**という概念について考える。Sperber and Wilson (1995²) は、関連性を**認知効果（cognitive effect）**と**処理労力（processing effort）**によって定義している。

認知効果とは、発話によって聞き手の想定（考え）に何らかの変化が起きることであり、認知環境が修正される方法としては次の3つが挙げられる。

- (1) 不確実なコンテキスト的想定を確定化する場合
- (2) コンテキスト的想定と矛盾し、誤った想定を放棄する場合
- (3) コンテキスト的想定と結びつき、コンテキスト的含意（contextual implication）を引き出す場合

以下、認知効果が得られるプロセスについて具体例を挙げて考える。例えばある朝、あなたは以下のコンテキストを想定して駅に向かっているとする。

- (4) <コンテキスト>
 - a. いつも乗る電車に乗れるだろう。
 - b. もし、いつも乗る電車に乗れたら、授業に間に合うだろう。
 - c. もし、いつも乗る電車に乗れなかったら、遅刻してしまうだろう。

あなたは駅に到着し、時刻通りに電車が到着した場合「電車に乗れる」と思い、「認知効果の修正方法」で挙げた(1)と(3)の2種類の認知効果が生ずる。つまり、「電車に乗れる」という新情報が(4a)の想定を確定化し、(4b)の想定と結びつき、「授業に間に合う」というコンテキスト的含意を導く。

ある発話が聞き手の持つ想定と相互作用し、認知効果を持つ場合、その発話は「関連性」を持つが、認知効果が大きければ大きいほど関連性は高いと定義される。関連性が高い情報とは、余分な処理労力をかけず、効率的に解釈できる情報である。

処理労力とはある情報を処理する際に要する心的労力である。関連性理論では発話解釈を心理的な問題ととらえていることが他の語用理論とは異なる点であるが、社会的・言語的要因に加え、処理労力という認知的要因も、発話解釈に影響を与えていている。

これまで見てきたように、ある情報があるコンテキストにおいて認知効果を持つ場合に関連性があるといい、その認知効果が高ければ高いほど関連性は増す。先に挙げたコンテキスト（4a-c）が想定される場合、駅に到着し、時刻通りに電車が到着した場合、(i)電車に乗れる、(ii)電車に乗れないということはない、(iii)電車に乗れないということはないし、いつもより混雑している、等様々な考えが思い浮かぶ可能性がある。おそらく(i)-(iii)のうち最も思い浮かびやすい、つまり関連性が高いものは(i)であり、最も頭に思い浮かびにくい、つまり関連性が低いものは(iii)と考えられる。しかし、いずれも「電車に乗れる」という想定を確定化し、「授業に間に合う」というコンテキスト的含意を引き出し、それ以外の認知効果は持たないという点で(i)-(iii)の認知効果は等しい。

仮に関連性の高低が認知効果のみに基づいて判定されるのであれば、(i)-(iii)の「関連性」に差は認められないということになる。関連性の高低を説明するためには、情報を処理する際の労力も大いに関わってくる。

ここまでを整理すると、関連性の評価には(i)認知効果、(ii)(その認知効果を得るために必要とされる)処理労力、が関わっており、関連性、認知効果、処理労力の関係は次のようにまとめることができる。関連性は認知効果と処理労力とのバランスで決定され、他の条件が同じであれば認知効果が大きいほど関連性の度合いが高く、処理労力がかかるほど関連性の度合いは低くなる（処理労力が少ないほど関連性は高い）。

人間の認知システムは、潜在的に関連性の高い情報を取り出すように（関連性を最大にするように）働く性格を持ち、日常的に入手できる多くの情報から、最も関連性が高い情報に注意と処理労力を払い、かつ関連性が最大になるような処理を行っていると考えられる。このような人間の認知に関する性質を**認知的関連性の原理（cognitive principle of relevance）**といい、インプットされる情報の認知効果が高いほど、また処理労力が低いほど、関連性は高まる。この原理は効率性をめぐる原理と言え、関連性理論では、この認知的関連性の原理があらゆる発話解釈の原理となっている。

（渋沢 優介）